

第 40 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2009 年 11 月 21 日～23 日（金沢大学）  
セッション討議内容の記録

セッション名：景観のイメージ分析	
日付：11月22日（日）曜日、セッション時間：9:00～10:30	
司会者名（所属）：福井恒明（東京大学）	
討議内容	セッション全体：全体としては特になし
	<p>（151）杉本英大（金沢市役所）：周辺環境に調和した道路標識のあり方に関する検討～構造改革特区の認定を活用して～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・行政からこのような発表をしていただけることに感謝。ぜひ継続的に。</li> <li>・標識縮小の工学的検証をどこまで行うつもりか 安全性が確保できることが検証できることが説明できる範囲まで。</li> <li>・議論したい点として挙げられている、標識を取り巻く周辺条件の定性的・定量的評価については、研究レビューを行っているのか。特に行っていない</li> <li>・景観向上を目的に、標識のサイズと文字縮小を行うとの枠組みだが、発表後半では、視認性向上のため、文字サイズの拡大や路面標示など、かえって景観を悪化させる方向の補完策の可能性が提示されている。標識の必要性についての議論はないのか。実際に撤去した箇所もある。いずれにせよ、安全性第一で検討せざるを得ず、道路管理者、警察と協議を進める。</li> <li>・標識令は画一的な決まりで使い勝手が悪い。特区申請により標識に手をつけようというやり方は参考になる。</li> <li>・標識のサイズ、文字の大きさ以外の点で景観上の配慮として検討した点がなかったか。色彩に関する議論もあったが、これを変更すると利用者が混乱すると考えられた。</li> <li>・高齢者がこれから増えてくる中で、標識サイズの縮小について、庁内で慎重な意見はなかったか。高齢者への配慮は議論になった。視認実験は50代までが対象だったが、今後60代以上も追加予定。</li> <li>・上記に関連し、縮小後に「見えにくい」という回答をした方の属性などを検討すべきでは。</li> <li>・外国人観光客を対象とした場合の課題は検討されているか。英文標記が日本語と同じように扱えるとは限らないと考えている。視認性の検証が今後の課題。</li> <li>・「サイズや文字が小さくても問題ない」という一般的な結果が出ると、標識令を否定することになる。金沢ならではの事情によって（沿道の屋外広告物の統制ができていますので等）縮小が可能になるとのロジックが必要ではないか。今のところ、直線道路で、沿道の情報量が少なければ問題ないとの結論を得ている。</li> </ul>
	<p>（152）天野真衣（東京大学）：商店主の自発的行動を含めた軽微な街路景観改善行動による歩行者の印象の変化に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「議論したい点」として挙げられている「景観改善を目的とした態度・行動変容のあり方について」は、広範で直接議論できないので、具体的な議論でそれに替えたい。</li> <li>・景観規制を見た目の規制と捉えるのではなく、景観形成の担い手の意識・活動に働きかける必要を</li> </ul>

指摘している点が大変意義深い。文化的景観の概念にも通ずる。

・本研究では比較的日常的な利用者の多いと思われる商店街を対象としているが、景観改善が利用者の行動に変化を与えうることを言うには適切なのだろうか（「また来たい」という質問が意味をなすような場所なのか、景観改善とは関係なく利用せざるを得ないような場所の可能性はないか）。

対象地は継続的に研究対象としている場所。以前から店主らの景観改善意欲が高い。社会実験についても快く引き受けてくれた。看板やのぼりを控えることは、単独の商店にお願いすることは難しく、商店街全体が対応してくれたことが研究成果につながった。

・本研究が成功したのは、社会実験に協力してもらったところである。むしろこの一連の研究についての課題は、店主の自発的行動をどこから引き出し、どうやって維持していくかという点に張る。歩行者の印象が改善されたことは店主らに伝えたが、継続して景観改善を続けようという話にはなっていない。景観改善に関する客観的/技術的データを明示することによって、景観改善が進むと期待している。それを媒介にして、景観改善のシステムが回り始める。本研究のような手法を用いる研究者や行政は着火剤の役割。

・本研究は、店主の自発的行動の協力ゲームと見なせる。しかし、その解は実はあまり安定ではなさそう。それを安定させるにはどうしたらよいのか。店主の中に協力構造を作るだけではうまくいかない。非協力者が来ると破壊されてしまう。なんとか街並み規範の共有につながっていくように誘導していきたい。

・景観改善による店主の利得は、売り上げがあがるとは言い難いが、顧客満足度があがるといった観点でのものであろう。

・共分散構造分析については、対象の商店街によく来る人と来ない人では違うのではないかと。週2回以上来る人とそれ以外の人に分けて分析すれば、よりはっきりした成果が出るのではないかと。

(153) 清水玄輝 (東京電機大学): 園庭芝生化の実態とその評価意識に関する研究

・議論したい点として、園庭芝生化を土木計画学研究発表会で発表する意義が挙げられているが、発表者ご自身としてはどのように考えているのか。幼稚園庭は公共空間の一種であると考えており、その意味で土木計画学の研究対象となりうると思われる。具体的には、園児だけではなく、その親も集う場所としてまちづくりに関係していると考えます。

・園庭芝生化によってもたらされる効用は何か。自然が増える、環境に優しい、といったプラス面と、費用がかかる、手入れが大変といったマイナス面がある。

・芝生にどのような機能があるかは調査されているのか。機能とそれに対するイメージを対応させることが芝生化推進の立場からは重要ではないか。機能は特に調べていない(アンケートの自由回答によって得ている)芝生化によって園庭での活動が増えるのではないかと考えている。機能をはっきりさせた上で、芝生化に対する認識構造を議論することが重要だろう。芝生化された園での実態調査も有効ではないか。